

トランスパーソナル心理学の一源泉としてのグルジェフ

浅井 雅志 京都橘大学*

Gurdjieff as a Source of Transpersonal Psychologies

ASAI Masashi

序

かつて私は、2002年に出版したジェイムズ・ムア『グルジェフ伝』の翻訳のあとがきにこう書いた。

「われわれはいつも儲けています。だからわれわれには関係ありません。戦争であろうがなかろうが同じことです。われわれはいつも儲けているのです。」(『奇蹟を求めて』)——ロシア時代、最後のベテルブルク訪問を終えたグルジェフが、モスクワまで列車で帰った。同じ客車に乗り合わせたAという著名なジャーナリストが、ある新聞に「路上にて」という記事を載せ、ここである不思議な東洋人との会話を記録している。上に引いた言葉はその中に出てくるものだ。鋭敏なウスペンスキーはすぐこれに注釈をつけ、こう言っている。「Gはもちろん、エソテリックなワークのこと、つまり〈知識の収集〉や人々を集めることを言っているのである。しかしAは彼が石油のことを言っていると思い込んでしまったのだ。」そのとおりである。しかしそれ以上でもある。けだしこの言葉は、グルジェフ

フというひとりの稀有な人間が世界にもたらした知と行の一大体系の神髄を表現しているといっていいただろう。

ロシア革命の混乱を避けながら逃亡を続け、そしてその逃避行そのものをワークに変換してしまうグルジェフという男。多くの者が恐怖にとりつかれ、幻想と狂気に陥っていったあの混乱を、実に「ずるく」泳ぎぬき、コンスタンティノーブルへ、さらにはヨーロッパへと脱出していった男。——この逃避行は本書の圧巻のひとつであり、またこれまでのどの類書よりも詳しいものだ。そこからは、コーカサスの山々を越える弟子たちの不満の声や荒い息遣いさえ聞こえてきそうである。その苦難を、グルジェフはひとつのワークに変えてしまった。「儲けて」しまった。いつも、どんなことがあっても、たとえそれが戦争でも、そこから「儲け」を出す。これがいかに至難の業であるかは、日々のちょっとしたことに苛立ち、怒り、嘆き、困難を避け、あるいは先送りしようとしている私／われわれの日常を振り返れば一目瞭然であろう。われわれの通常の一日は、まったく「儲け」がないまま終わってしまう。「儲け」もないまま、喜怒哀楽に振り回される日々が続く人生の中で、誕生の時に渡された資金は

* asai@tachibana-u.ac.jp

〒607-8717 京都市山科区大宅山田町34

数十年で底をつき、まったくの無一文になって塵に還っていく。——グルジェフの見る大半の人間の人生はおおよそこういったものだ。そして多くの者はこれを是としている。「これが人生」というわけだ。しかしどの時代にも、「これが人生」と思えない一群の人々が存在した。(603-604)

トランスパーソナル、あるいは広義の「オカルト」もその中に含まれるであろういわゆる「永遠の哲学」は、人類進化のどの段階でか、この「これが人生」と思えない一群の人々によって始められ、継承されてきた。この伝統には目くるめくようなバリエーションがあるが、グルジェフという特異な師の教えの特徴は、ここに述べたように、特殊な道によらず、人生そのものを材料として、そこから常に「儲け」を出し、それによって目標に到達しようとするところにある。この目標は、それぞれの伝統が「ニルヴァーナ」とか「神との一体化」、あるいは「悟り」とか「自己実現」とか「超越」とか「高次の認識の獲得」等々、さまざまな名称で呼んできた。グルジェフ自身は「大きな『私』あるいは『主人』の獲得」とか「行為できるようになること」、あるいは「不死性の獲得」といった言葉で表現したが、他の伝統が目標とするものと大きく異なるわけではない。

人間がこの目標を達成するために生み出した種々の行法を、グルジェフは三つに大別し、それぞれ「ファキールの道」「修道僧の道」「ヨーギの道」と名づけた上で、自らが示す道を「第四の道」と呼んだ(茶目っ気たっぷりの彼は、「ずるい人間の道」とも呼んでいる)。この道は「砂漠への隠遁も生計の道を放棄することも要求しない。……それどころか、人が第四の道を始めるときに置かれている状況、いうなればワークがその人を見出したときの状況が、少なくともワークの最初期には、最良のものなのだ。その

状況は彼には自然なものだ。つまりその状況は、その人自身なのだ。というのは、人の生活とその状況は、彼の人となりに関連しているからだ。生活から生み出された状況以外はすべて、人間にとっては人工的なもので、そんな人工的な状況のもとでは、ワークは彼の存在の全側面に触れることはできないだろう」(『奇蹟を求めて』)。

では、この特異な道、後に「ワーク」と総称されるようになる行法を生み出したグルジェフとはいかなる人物なのか。

I グルジェフの生涯

彼の前半生、すなわち誕生から1912年にモスクワに現れるまでの彼の足跡は、ジェイムズ・ムアが自身の著書の題名にも使った「神話的」と呼ぶのが適切だろう。主たるソースは彼の主著『森羅万象 (All and Everything)』、すなわち第1シリーズ『ベルゼバブの孫への話 (Beelzebub's Tales to His Grandson)』、第2シリーズ『注目すべき人々との出会い (Meetings with Remarkable Men)』、第3シリーズ『生は〈私が存在し〉て初めて真実となる (Life is Real Only then, When "I Am")』である。しかしモスクワ登場以後は、彼の思想をもっとも正確かつ「わかりやすく」記したのものとして、グルジェフ自身が感謝を込めて認めている『奇蹟を求めて』はじめ、弟子たちの回想録に比較的詳しい記述がある。

まず生年自体諸説あるが、グルジェフ自身は1866年だといっていた (Wikipedia ははっきり1866年1月13日としている)。場所はトルコ国境に近いロシアのアレクサンドロポール、現在のアルメニアのギュムリである。以後の足跡は以下のとおりである。

- 1878 一家でカルスに移住
- 1885-1912 トルコ、エジプト、スーダン、中央アジア、インド、チベットを遍歴。
- 1912 モスクワに現れ、グループ結成。サンクト・ペテルブルクでユリア・オストルフスカと結婚。ウスペンスキーに会う。以後、この両都市でワークを指導。
- 1917 ロシア革命。アレクサンドロポールに移り、以後、エッセントウキをはじめ、トランスコーカサス、黒海沿岸を移動しつつワークを指導。
- 1918 ウスペンスキー、グルジェフから離れる。
- 1919 トビリシで「人間の調和的発展のための学院」創設。
- 1920 コンスタンティノーブルに移り、ワークを継続。
- 1921 ドイツに移住。
- 1922 ロンドン訪問。オラージュらに会う。フォンテーヌブロー・アヴォンにプリウーレ購入。ワークの基地とする。
- 1923 パリでヨーロッパ初のムーヴメント・デモンストレーション。
- 1924 半年間アメリカに滞在。多くの弟子を獲得。『ベルゼバブ』執筆始める。
- 1925 トマス・ド・ハルトマンと作曲活動始める。
- 1926 メイベル・ドッジ・ルーハン、ニューメキシコ州タオスに土地を提供し、ワークの支部創設を提案するが、辞退。アリスター・クロウリー、プリウーレを訪れるが、グルジェフは拒否。
- 1928 オラージュをはじめ多くの弟子を追放。『ベルゼバブ』一応擱筆。『注目すべき人々との出会い』執筆始める。
- 1929 2度目のアメリカ訪問。ド・ハルトマン夫妻プリウーレ追放。
- 1930 2-4月、アメリカ。冬、アメリカ。
- 1931 春、フランスに帰る。夏、ウスペンスキーと最終的に決裂。11月、アメリカ。
- 1932 1月、フランスに帰る。5月、プリウーレ閉鎖。冬、アメリカ。
- 1933 秋、アメリカ。
- 1934 6-7月、ウイスコンシンにかつての弟子、オルギヴァンナを訪ね、夫フランク・ロイド・ライトに強い印象を与える。オラージュ死去。南部を回る。
- 1935 1月ニューヨークに戻る。9月パリ。
- 1936 パリで女性だけのグループ指導。
- 1939 3-5月、アメリカ。
第2次大戦中はパリにとどまり、細々とワークを指導。
- 1947 ウスペンスキー、イギリスで死去。
- 1948 12月、アメリカ。
- 1949 3月、フランスに帰国。10月29日、パリで死去。

II グルジェフの思想

このような生涯を送ったグルジェフの思想はきわめて複雑かつ難解だが、以下、その根幹の

一部を概観してみよう。

1 複数の私

「人間は永続的かつ不変の〈私〉などまったくもっていない」。[人間は長い間同一であるこ

とは決してない。ある人がイワンと呼ばれていれば、われわれは彼を常にイワンだと考える。実は決してそうではないのだ。今イワンなら、次の瞬間にはピョートルになり、一分後にはニコライに、セルゲイに、マシューに、サイモンになる。……そして彼らはみな自分を〈私〉と呼ぶのだ』（『奇蹟を求めて』93-94）。あるいはこうも言う。「人間は一個の〈私〉をもってはいない。そのかわりに何百何千というバラバラの小さな〈私〉があり、それらはほとんどの場合互いに他の存在をまったく知らず、接触もなく、それぞれか、互いに敵対的、排他的で、比較さえできないのだ」(103)。これはいったい、どういうありようを描いているのか。人間はみな「多重人格」だと言っているのか？ それとも「分裂症」なのか？

人間の中には複数の〈私〉がいるという考え方は、グルジェフの難解な思想の中ではむしろ「理解」しやすい方であり、私も長くそう考えてきた。心理学が説くところとも共通するので、人にも比較的説明しやすく、聞いた人も分かった気がする。しかし年月が経つにつれて、実はこれは大変なことを言っているのではないかと徐々に思うようになってきた。それはまず、特定の人「病氣」ではないこと、しかしさらに重要なのは、グルジェフのこの言辭は、「私とは誰か」というよくある疑問を、「私とは何か」に、そしてさらには、「私とは存在するのか」という根源的な疑問へと転換しているのではないかということだ。

人間はみな名前をもち、とりあえず連続した記憶をもっているために、それらを土台として自らを「誰々」と規定し、あるいは思い込み、その一個の「私」が、成長したり衰退したりすることはあるにせよ、ともかくも生涯同一のものとして続くと考えている。しかしこれは熟慮や冷静な観察による結論というより、むしろ広い意味での教育によって教え込まれたものだ。

換言すれば、「私」というものを知的に把握するときには、名前という符合と記憶の連続に基盤を置こうという暗黙の了解がいつのまにか定着してしまったのだ。先の引用でグルジェフが述べているような事態は、例えば「感情の起伏」とか「気分の変化」などの名称および概念でヴェールをかけられ、「私」という一個の連続したものの存在は温存されたのである。

グルジェフは広く受け入れられたこの見方に根本的な疑義を呈する。あるときはこう考えてこう行動し、別のときは別様に考え、行動する「私」は、一人の「私」とは呼べない。便宜のために仮にそう呼ぶとしても、それは決して本来あるべき、すなわち人間という名にふさわしい存在ではない。後に決別することにはなるが、グルジェフに深く学んだウスペンスキーはこうしたありようを「人間内部の統一性の欠如」という言葉で記録しているが、これは誤解を招く表現かもしれない。この呼称には統一体としての「人間」が前提され、「複数の私」は、例えば「多重人格」などの症例のような異常形態だという含みがある。しかしグルジェフの言葉はこれよりはるかに深刻で、「複数の私」がむしろ人間の常態で、しかもそのときの「私」は、あるべき「私」とは別の何かである、端的に言えば、大半の「人間」においては「私」なるものは存在しないと断言しているのである。

こうした見方の底をさらに探っていくと、以下のようなことが見えてくる。すなわち、グルジェフがさかんに問題にしている人間内部の刻々の変化、感情の起伏とか気分の変化と呼び習わされている変化を、多くの人間はとりわけ深刻なことだとは感じていないのではないか。これはおそらくグルジェフ理解の最初の大きな分岐点だろう。先に述べた、「これが人生」、あるいは「人生、楽あれば苦あり」的な発想をする限り、あるいは人間の感情には起伏があって当然だ、喜びの後には怒りがくるのだ、という

見方を自明のものとする限り、グルジェフがなぜこうした変化をこれほど問題視するかが理解できないだろう。たしかにわれわれの人生には起伏がある。外部の出来事や体調などによって、たしかに感情や気分は左右される。グルジェフは『ベルゼバブ』で、自己完成に必須のものとして「パートクドルグ義務」なるものを説くが、これは地球語では「意識的努力と意図的苦惱」で、そこで中心になるのは、自己同一化をしないこととあわせて、怒りや自己憐憫などの否定的感情を表現しないことだと言っている。そうした言葉を考え合わせると、彼はこうした起伏・変化自体を否定しているようにも見える。しかし、そうか？

グルジェフの周りにいた人々の残した回想録などを見ると、彼自身にもこうした感情・思考・行動の起伏や変化は、むしろ豊かすぎるくらいあったようで、彼の激しい怒りはほとんど神話となっている。彼の主著3部作の「第3シリーズ」、『生は〈私が存在し〉て初めて真実となる』では、たびたび深い自己憐憫にとらわれるグルジェフを目にする。あるいは、ニューヨークに送り込んだ熱心な弟子、A・R・オラージュとの関係でも大きな感情の起伏を見せる。オラージュはグルジェフの「外交官」として奮闘を続けていたにもかかわらず、ある時グルジェフは、オラージュが指導するニューヨークのグループを実質的に解散させ、メンバーにオラージュとの接触を禁じる。それどころか、オラージュその人にも「オラージュとの接触」を禁じる誓約書への署名を求める。この、自らの外的・内的な「追放」を告知する署名を、いささかの躊躇もなくオラージュがやってのけたという報に接したグルジェフは、自室に駆け込んで泣き崩れる。そして後年、そのオラージュが亡くなった時、グルジェフは深い衝撃を受ける。また、かつての高弟の中で最も論理的思考に秀でていたウスペンスキーも、グルジェフの不可解な変化

の犠牲者の一人であった。10年近くグルジェフのもとで学んだ彼が、ついに彼から離れ、英国で独自に活動しようと決断した最大のきっかけは、次のような思いだった——「システムとグルジェフとの間に区別をつけることが肝要だ」、いや、さらに過激に、「グルジェフの思想を理解する上で最大の障害はグルジェフその人だ」。(この点は、後にまた別の観点から触れたい。)

しかしウスペンスキーにこう思わせたグルジェフの「振幅」は、通常の人間に見られる感情の起伏ではないし、言行不一致といった類のものでもない。その証拠に、グルジェフに（通常的人間感覚からすれば）「不当に」扱われた人々も含めた多くの者が、こぞって彼の圧倒的存在感を確言している。ウスペンスキーは後年、後に著名なグルジェフイアンになるロバート・デ・ロップの「ミスター・グルジェフはとても奇妙な人だったのでしょね」という質問に、「奇妙な！彼はけたはずれの人間だった。どれくらいけたはずれだったか、君には想像もつかないだろう」(de Ropp, 91)と言い放っている。後年、死の1年前にグルジェフに会い、教えを受けたデ・ロップ自身も、「彼は疑いなく私が出会った最も尋常ならざる人物だった。……別の惑星どころか、別の太陽系から来たかのようにだった」(174)と述べている。オラージュも、あれほど理不尽な（ように見える）扱いを受けながら、グルジェフから離れた後でも、「グルジェフに出会ったことをどれほど感謝しているか、言葉には尽くせない」と述べている。あるいは、苦難の年月を超えてロシアからフランスまでずっとグルジェフに付き従ってきたトマスとオルガのハルトマン夫妻（オルガは『ベルゼバブ』の口述筆記をした）も、まったく理由も告げられず突如フォンテーヌブローの「人間の調和的発達のための学院」から追放されるが、そのオルガは、その著書『グルジェフ氏と

の日々』の中でこう書いている。「グルジェフ氏は不可知の人物であり、一つの神秘です。彼の教えについては誰も知らないし、その出生も、なぜモスクワとペテルブルクに現れたのかも知りません。それでも、彼と接触した者は誰でも彼に従いたいと思いました。そして夫と私もその例外ではなかったのです」(xvii)。単に感情の起伏の激しい、説くところと行なうところの違う人間が、これほどまでに圧倒的な印象を人々に与えたとは到底考えられない。つまり彼は、『ベルゼバブ』で言うところの「主人」、「客観的な意味における周りの人々への献身的な行為……の結果、人々が自然に彼の前でぬかずきたくなり、彼のいうことであれば敬意をもって行いたくなるような、そんな何かを獲得した人間」(754)を具現していたといえるだろう。

その意味では、よく言われるように、グルジェフのそうした変化はすべて演技であり、またそうした演技ができることこそがその人間の^{ビイング}存在の証なのだ、というのも、ある真実を含んでいるかもしれない。あの有名なエピソード——グルジェフがニューヨークから帰ってきたオラージュをものすごい勢いでしかりつけている。怒り心頭に発しているかに見えた彼が、その時コーヒーマットを持って部屋に入ってきたフリッツ・ピーターズににっこりほほえむ。そしてピーターズが出ていくとまたもや猛烈に怒り始める、というエピソードは、そうした彼の能力の証左の一つであるのだろう。しかしわれわれには誰もこんなことはできない。それというのも、これはいわゆる舞台上の「演技」とは違うからである。

この「複数の私」という人間観をグルジェフは、「人間は眠っている」、あるいは「人間は機械である」とも表現している。「人間は愛しも、憎しみも、欲しもしない。それらはすべて起こる」(『奇蹟を求めて』44)というわけだ。『ベルゼバブ』ではこういう。「平均的人間の内的

な精神生活というのは、結局のところ、以前に受け取った種々の印象が、そのとき体内に生じていた何らかの衝動の働きによって、彼の中にある三つの異なる部位あるいは(脳)の全部に固着し、その印象から生じる二つか三つの連想の流れが〈機械的に接触〉するという、ただそれだけのことにすぎない」(742)。こうした、人間は風に吹かれる木の葉のように、外部の出来事の影響の「犠牲者」だという見方は、デカルトやラ・メトリの「人間機械論」などにも見られるようにグルジェフ独自のものではないが、彼の特徴は、そのために人間がこの地球上で定められた、あるいは与えられた「潜在的な力」を発揮することを妨げられ、存在の意味そのものを奪われているという、いわば実存的な見方にある。こうした人間の状態を彼は、「人間は月の餌食である」という強烈な言葉で表現するが、その意味するところは、人間は「彼自身の個人性とは何の関係もない全宇宙的目的に無意識のうちに全面的に使っている奴隷」(『ベルゼバブ』743)だというものだ。

グルジェフはこの人間機械を、5つのセンターからなる有機体と見る。上層にあるセンターとして、①思考センター(比較を通して働く)②感情センター(快か不快かで判断する)。下層には、③動作センター(模倣能力をもつ。知性、本能に依存しない)④性センター ⑤本能センター(有機体の内的機能、反射機能をつかさどる)がある。そして、人間を機械たらしめているのは主としてセンターのアンバランスな機能、あるいは誤用だという。(例えば空想は動作・感情センターが思考センターを使う結果生じる、など)

われわれがこのようなグルジェフの人間観に共感し、そんな一生は過ごしたくない、というところまで同意したとする。しかしそこからどうすればいいのか。グルジェフが言うには、機械としての人間である自分を知らなくてはなら

ない。しかし、機械的に生きたくない、自分の主人になりたい、等々の欲求は、私の中の「私」の一つがたまたまある刺激（例えば読書）を受けた結果抱いたものであって、他の「私」の知ったことではない。当然、総体としての「私」という有機体の欲求としては、これが長続きするはずもない。グルジェフ自身こう言っている。「しかし、自分の可能性をいかに明確に理解したとしても、それで実現に近づくわけではない。これらの可能性を実現するためには、人は自由への非常に強い欲望をもたねばならず、この自由のために、喜んですべてを犠牲にし、危険を恐れずあらゆることをやってみなくてはならないのだ」（『奇蹟を求めて』105）。しかしわれわれは、いや、総体としての「私」は、それほどの犠牲を払ってまで自由を求めているのだろうか？

グルジェフその人の中に、こうした可能性の実現へのきわめて強い欲求があったことは間違いない。第2シリーズ『注目すべき人々との出会い』は、哲学的真理ではなく、人間の可能性を十全に開花させるいわば「テクニク」としての真理を追い求める探査行の不思議な記録だが、そこには彼の貪欲なまでの「覚醒」へ欲求が語られている。また『生は〈私が存在し〉て初めて真実となる』でも、中央アジアでいわゆる「真理の探求者」として放浪している最中、何度か流れ弾にあたって負傷し、それから回復しているときに彼の中に湧き起こってきた「内省」を述べている。

ここ数日の体調から判断するに、私はどうやら生き返ったようで、ということは、これからもういやおうなしに、以前のうんざりするような生活をだらだら続けていかざるをえなくなる。

ああ、神よ！ いったい私には、あの最後の不幸が起きる前の半年間続いたような、

完全に冷静で、それでいてきわめて能動的な状態で過ごした時期に経験したことを、すべてもう一度経験することはできないのでしょうか。

通常が目覚めた状態における内的・外的な表現行為に対する後悔と、孤独、失望、食傷等々との間を、ほぼ規則的に行き来する感情を再び経験するだけでなく、それよりもまず、〈内的な空虚さ〉に対する恐怖におののいて、あちこちを訪ね歩くという、あの経験をもう一度することはできないのでしょうか。（42-43）

ここでいわれている〈内的空虚さ〉とは、むしろ人間の機械性、「人間が眠っている」ことの帰結であるが、グルジェフはこの眠りの中の人間を、『ベルゼバブ』の最終章「著者より」で、この上なく明瞭に、グロテスクなまでに生々しく描いている。裕福なある人間がある朝目を覚ますと、嫌な夢の記憶で気分が悪い。髪をとこうとすると、ブラシが鏡にあたってヒビが入り、さらに気分が悪くなる。外出してタクシーに乗ると、その運転手の顔が誰かに似ており、そこから連想が飛んで、すばらしくおいしかったメレンゲを思い出す。お気に入りのカフェに行くと、隣のテーブルに二人のブロンドの女性が座っていて、「彼は私の好みのタイプ」と言っているのが聞こえ、歓喜に打ち震える。帰宅してヒビの入った鏡を見てももうなんともない。ビジネスの電話をかけると、間違った番号にかけてしまい、相手からひどくののしられると怒りが爆発する。そこへあなたにこびへつらった手紙が届き、それを読むとこの上なく幸せな気分になる……（734-36 参照）。ここに描かれている普通の人間、私やおそらく皆さんのような人間の、無様な、しかし現実の生活と比べると、多くの人の証言の中のグルジェフ自身ははるか

に超越的な存在のように見えるが、しかしまったく無縁なわけではない。いわゆる凡人と異なるのは、そうした生活に対する苦痛が常人をはるかに越えていたという一点につきる。それを克服したいという欲求が、冷静かつ能動的な(すなわち眠っていない)生を希求させるのである。そしてその状態を保証するのが、自分が眠っているという事実と直面した時に感じる恐怖だということである。

彼はこの恐怖を「著者より」の中でこうも表現している。

もし平均的現代人に、たとえ思考の中だけにでも、あるはっきりした日、例えば明日でもいいし、あるいは一週間後、一カ月後、一年もしくは二年後でもいいが、そういうある明確な日に、自分が死ぬ、それも間違いなく死ぬということを感じるか思い出すかする能力が与えられているならば、人はこう自問せざるを得ないだろう。これまで自分の人生を満ちし、作り上げていたものの中で、いったい何が残るのか、と。(『ベルゼバブ』747)

これは大著『ベルゼバブ』本論の締めくくりの言葉と完全に共鳴する。

惑星地球の生物を救う唯一の道は、彼らの体内にクンダバファ（はるか古代に、人間に自らの生存の真の理由[宇宙維持のためにその死から発する振動を出させる]を認識させないために、神聖個人たちが人間の体内に植え付けた器官。おかげで人間は現実をさかさまに知覚するようになった。これは後に除去されたが、その特性の諸結果は残り、人間の生を異常なものにしている)のような新しい器官をもう一度植えつけることです。ただし今度は、この哀

れな者たちすべてが、生存期間中ずっと、自分自身が、そして目に留まるすべての者が必ず死ぬということを絶えず感じ、認識するような器官を植えつけなければなりません。(721)

前にも述べたが、こうした見方をどこまで共有できるかがグルジェフ理解の大きな試金石となる。これは「人生、楽あれば苦あり」的な人生観の対極にあるもので、自分のこの人生は何らかの目的をもち、意味に満たされていなければならない、私は何らかの宇宙的な役割を担って生まれてきたはずだ、という直感に裏打ちされたものだ。そしてまさにこの地点で、グルジェフは一般の人間機械論から離れる。彼は、人間には二つの存在様式があり、一つは機械的存在、もう一つは自己完成に向かう生き方だという。大半の人間は前者として生きるが、一部の人間は、「全宇宙的な実現に仕えながらも同時に、大自然の恩寵によって、自分の表現行為の一部を自分自身の〈不滅の存在〉獲得のために使う能力を得る」(『ベルゼバブ』748)という。そして後者の道に入る第一歩が自己の機械性を知ることであり、その最大の武器が自己観察だと言う。「正しい自己観察を行えば、その最初の日から、まわりの文字通りすべてのものに直面した自分が、完全に無力でどうしようもない存在であることを明確に把握し、疑いの余地なく納得するであろう」(『ベルゼバブ』738)。——こうした自己知に至る自己観察はきわめてまれであろう。しかしそれでも、グルジェフはこの「自分が無であるという感覚」の重要性を強調する。「覚醒するとは、自分が無であることを自覚すること、つまり自分が完全に、絶対的に機械的であり、全く救われようがないということを自覚することにはほかならない」(『奇蹟を求めて』339)と。

人間が「私」と呼び習わしてきたものの実体

は、古来哲学者たちを悩ませてきた。それほどに把握することが困難な存在だ。しかし正しい自己観察を長期にわたって続ければ、その実体を実感的につかむ（グルジェフ流に言えばその「味」を味わう）ことができるとグルジェフは言う。われわれはグルジェフの言うことを鵜呑みにする必要はない。彼自信がそれを諫めている。しかしこの観察を長期間続ければ、そこで「つかまれた」ものは、グルジェフが「自分が絶対的に無であると感じるときに立ち現われる感覚」と呼ぶものと酷似するものであることがおぼろげながらにわかってくる。これは彼が「自己想起」という言葉で示そうとした人間の意識様態の第一歩ではなかろうか。こうして、私が無であることを自覚するにつれて「私」の存在感が増大するという、ほとんど宗教的とも言える逆説が立ち現れてくる。

しかし、グルジェフの思想と行法を宗教的と呼ぶかどうかは微妙な点だ。たしかに『奇蹟を求めて』では自分の道を「秘教的キリスト教」と呼んでいるし、『ベルゼバブ』では、「至聖絶対太陽」とか「永遠の主」とか「われらが無限の父」とかいう言葉で絶対の存在を措定している。また、「真の『私』の獲得のためには、現在の生のあなたにとって祝福と思えるものをすべて放棄しなくてはならない」（751）といった、伝統的な宗教を髣髴とさせる言い方もしている。あるいは、先に述べた「クンダバファー」を、コリン・ウィルソンのように一種の原罪論と見る見方もある。いずれにせよ、彼の人間理解、そして彼が説く人間が置かれている窮状からの脱却法の根底に深い宗教性があるのはたしかだ。

グルジェフは、宗教とは人間に「行為」ができるようにさせる行法体系、すなわち、何をなすべきか（教義・顕）といかになすか（秘密・密）を合体させたものだと見る。仏陀、イエス、ムハンマドといった宗教の開祖はそれぞれ、人間

の異常な生存を治癒するために天から使わされた存在で、当初の教えは真正のものであった。しかし人間の中にクンダバファーの影響が残ったために、その大半を曲解し、その真の機能は果たされないままになっているという。とはいえ、彼の道が伝統的な宗教の道でないことは「第四の道」という呼称からも明らかで、彼は以前の三つの道、すなわち伝統的な宗教の道を、全面否定するのではなく、統合的に超越することを目指したといえよう。

しかし、ともう一度逆接の接続詞を使うが、この点の微妙さに関して、彼の高弟たち、とりわけ最も理知的だったウスペンスキーが、グルジェフに無限の敬意を表しながらも、最終的に彼から離脱した事件は象徴的である。つまりその最大の要因は、彼の眼に映るグルジェフのこの「宗教性」であった。長い逡巡の後、彼はこう結論する。「実はグルジェフはわれわれを宗教の道へ、僧院の道へ導いており、それであるゆる宗教形態や儀礼の遵守を要求しているのだ」（『奇蹟を求めて』573）。そして前に引いた、「システムとグルジェフとの間に区別をつけることが肝要だ」、「グルジェフの思想を理解する上で最大の障害はグルジェフその人だ」というやや極端な結論に至るのである。これはウスペンスキーの「誤解」といってすむ問題ではなく、彼はグルジェフの思想の本質にある要素を敏感に感じ取ったからこそこの言葉を吐いたのだ。グルジェフは常々、怠惰な生物である人間にはワークは一人では絶対にできない、高次の叡智をもった師の指導の下で、グループの中で互いに切磋琢磨しなければワークは不可能だ、そして師には絶対服従しなければならぬ、といったことを強調してきた。こうした指示は、理知的な近代人ウスペンスキーの知的スタンスの根幹に抵触したであろう。その意味でグルジェフとウスペンスキーの「対立」は、古代人と近代人、あるいは古代的思考法と近代的思考法の対

立といえるかもしれない。

その意味でいえば、グルジェフの示した道は、近代人が直面する苦境、とりわけ近代的な自我の肥大から帰結するさまざまな苦境の解決法として、医学・心理学の分野で個を越える方向を目指すトランスパーソナルと呼ばれる道と共鳴するものがあるであろう。この講演の概要にも書いたが、グルジェフ自身、自分の思想や行方は西洋思想のまったく知らないことだと明言しているのです。トランスパーソナル心理学に限らず、ある学問分野の源泉に彼を位置づけるには注意が必要だ。概要には Wikipedia からの以下の言葉を引用した。

西洋世界の過去および現在の霊的な師であるグルジェフやアリス・ベイリーといったそうそうたる人たちの教義や思想が、トランスパーソナル心理学の主流にしばしば取り込まれている。こうした展開は一般に、トランスパーソナル心理学者がアカデミックな世界で尊敬される確固たる地位を得ようとする上で障害になると考えられている。(拙訳)

グルジェフとアリス・ベイリーという意表をつく並置に一般的なグルジェフ理解が垣間見えるが、この点はここでは置こう。ともかく、ここに述べられているような風潮は、これまで述べてきたグルジェフの思想・行法のラディカルさ（今日は触れられなかったが、たとえばその中には「ムーヴメント」と呼ばれる特殊な舞踏・体操がある）、「水素論」や「宇宙論」に端的に

見られる彼の思想の西洋思想との隔たり、「ごろつき賢者」と呼ばれたその言動のあまりの破天荒ぶりと反アカデミズム、あるいはオカルト性、あるいは異端性、こうしたものが相俟って生まれてきたのであろう。

しかし、いかにその全体像をつかむのがむずかしいにせよ、彼の思想が「永遠の哲学」あるいは「古代の叡智」の現代版であることに間違いはあるまい。彼は辺境の地での長い探求の後、突如 1912 年にモスクワに現れた。たとえそれがロシアという西洋の「辺境」であるにせよ、その出現の場として近現代において最も影響力の強い西洋を選んだのは、古代から引き継いだ叡智を世界に伝えるためにはこの地がもっとも効果的だと考えた結果であろう。もしそうだとしたら、トランスパーソナルと総称される運動が二〇世紀の後半になって花開いたのは、グルジェフが撒いた種の発芽の一つと見てもあながち間違いではないであろう。

引用文献

- ウスベンスキー、P・D・『奇蹟を求めて』浅井雅志訳、平河出版社、1981年。
- グルジェフ、G・I・『生は〈私が存在し〉て初めて真実となる』浅井雅志訳、平河出版社、1993年。
- 『ベルゼバブの孫への話』浅井雅志訳、平河出版社、1990年。(『ベルゼバブ』)
- ムア、ジェイムズ・『グルジェフ伝——神話の解剖』浅井雅志訳、平河出版社、2002年。
- De Hartmann, Thomas. *Our Life with Mr. Gurdjieff*. Baltimore: Penguin, 1972.
- De Ropp, Robert S. *Warrior's Way: A Twentieth Century Odyssey*. Nevada City, CA: Gateways, 1992. First published in 1979.